

第4回 国際的動向を踏まえたオープンサイエンスに関する検討会

議事概要

1. 日 時：平成27年2月23日（月）10:00～12:00

2. 場 所：中央合同庁舎8号館6階 623会議室

3. 出席者：（敬称略）

有川（座長）、安達（副座長）、関口、谷藤、恒松、林、村山の各構成員、原山総合科学技術・イノベーション会議議員

（有識者）物質・材料研究機構 藤田部門長、ELSEVIER Karlsson Vice President、ネイチャー・パブリッシング・グループ 新谷マーケティングマネージャー

（オブザーバー）文部科学省 榎本参事官（情報担当）、長澤学術基盤整備室長、西川地球観測推進専門官、経済産業省 渡邊研究開発課長、日本学術振興会 渡邊理事、科学技術振興機構 大竹理事

（事務局）森本政策統括官、中川審議官、匂坂参事官、真子補佐、須田補佐

1. 議事

(1) プレゼンテーション

3名の有識者から、国として示すべき基本姿勢及び解決すべき課題に関連して、プレゼンテーションが行われた。

- ・ 「材料イノベーションを加速するオープンサイエンスの動向」（物質・材料研究機構 藤田部門長）
- ・ 「Science 2.0 “Open Science（オープンサイエンス）” 過渡期にある科学」（ELSEVIER Karlsson Vice President）
- ・ 「Introducing Scientific Data: Initiative for Open Scientific Data at Nature Publishing Group: オープンな科学データへの取り組み-Scientific Dataを例に-」（ネイチャー・パブリッシング・グループ 新谷マーケティングマネージャー）

(2) 事務局説明

事務局より、報告書（素案）について説明があった。

(3) 主な意見等

上記のプレゼンテーション及び事務局説明を踏まえた意見交換が行われた。

(論文及び研究データのヘアクセスについて)

- 論文のオープンアクセス化に係る議論は進んでいるが、オープンデータについては、これから議論するということになる。
- 論文のエンバーゴについては、出版社などの公開方針が異なるので、報告書でその期間を定める必要はないのではないか。
- 国全体として、科学技術に関する研究データがどういったものなのかが把握されていない。各分野の研究データがどのようなフォーマットで、誰が管理しているのかなどを把握した上で、貢献に対する報酬や業績評価の在り方などを分野ごとに検討していく必要がある。
- 研究データを分類するに当たっては、標準的な分類を可能にするため、専門用語を統一し、研究データセットの定義、メタファイルの範囲、生データの保存場所及び形式等を明らかにする必要がある。
- 複数のデータベースに及ぶ研究データについては、横串検索や高速に検索結果を反映させる技術など、共通化・体系化が可能なところを考えなければならない。
- 研究データをオープン化する試みの中で、ネガティブな研究データもオープンにしようという動きがある。必ずしも当初の目的を達成しなくても何らかの意味がある研究データが存在するのではないかという考え方である。
- ネガティブな研究データであっても、再利用することで研究の重複を避けられる可能性がある。
- 研究者がネガティブな研究データをリポジトリや出版業界に提供することを促進するため、何らかの報酬等が必要である。

(研究データのレビューについて)

- 研究分野によっては特殊な実験装置等を持ってないと研究データの計測ができないので、研究データをレビューするに当たっては、データフォーマットなどの統一等が必要になるのではないか。
- 研究者が研究データを公開することによって研究データが引用されて評価され、何らかの形で業績に繋がるような仕組みがあることが望ましい。

- 研究データ引用の仕組みのあり方については、国際的にも議論されており、一部では既にレビュー付のオープンデータジャーナルも創刊されている。こうした動きを研究者が目にすることで自らデータを出していくことが業績評価になるという理解が促進されるものと考えられる。

(データキュレーターについて)

- 出版社におけるデータキュレーターの業務は、著者がリポジトリに格納した研究データをデータディスクリプターという記述として出版すること、研究コミュニティの審査員と編集委員と一緒に、データがきちんと再現できるような形で公開されるかという点を主眼にレビューを行うことなどである。
- データキュレーターには、全ての実験データをほかの分野の人が見ても理解しやすい形で記述をするという専門性が求められ、非常に多くの分野に通じてないと務まらないと思う。
- データキュレーターは日本にはほとんど存在していない。今後、オープンサイエンスの概念が広がることで、認知が進み、データキュレーターとして仕事をしたいという人も増える可能性はある。
- 今後、データキュレーターをどう育成していくかが大事である。他方、人材を育成するとなると時間がかかるので、研究者を経験した人材や民間技術者、大学の図書館職員などを活用したり、訓練したりすることも検討していく必要がある。

2. その他

- 次回は3月23日月曜日10時から開催する。